

# 東洋文庫ミュージアム 企画展 アジア人物伝－歴史を織りなす人々－

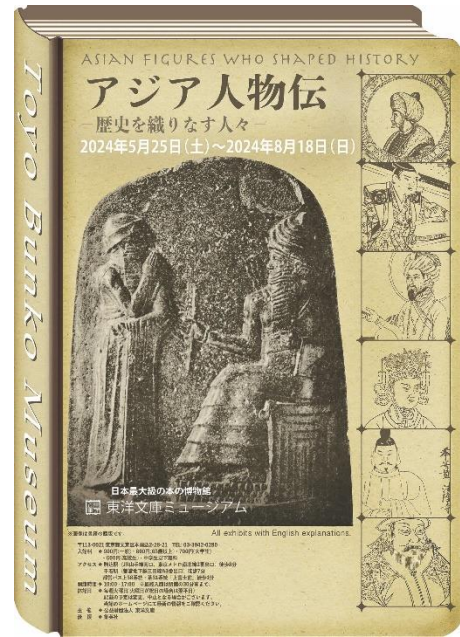
会期：2024年5月25日（土）～2024年8月18日（日）

会場：東洋文庫ミュージアム

主催：公益財団法人東洋文庫

後援：集英社

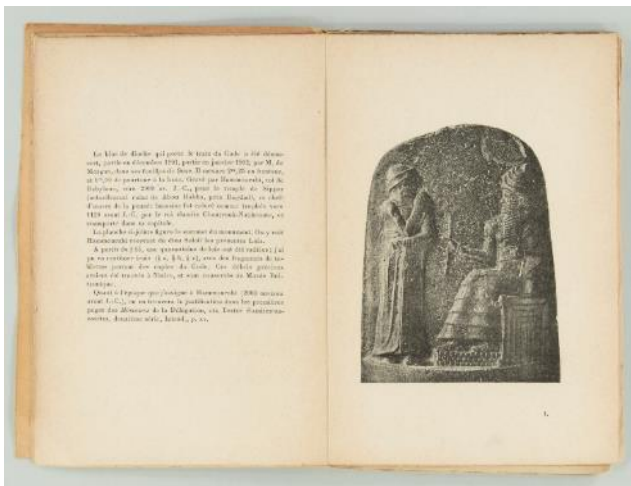
教科書や専門書など、私たちが歴史の流れを知るために手に取る情報は、国や地域別にまとめられていることが多いです。本展では、歴史に名を残した「人物」に着目して、日本を含むアジア全域を対象とした広い視点で、古代から近代までの歴史を通覧します。歴史上の人物が成したこととその影響を史料から見ていくことで、国、地域別ではないアジア史として、どのような時代の動きや特徴が浮かび上がってくるのか探ってみましょう。そして、「あの人とこの人は同じ時代の人なのか！」といった気づきを楽しんでいただけたら幸いです。



## 展示構成とみどころ

### 1. 古代帝国の成立と広大な宗教圏の誕生（紀元前1800年頃～7世紀頃）

展示はアジア各地で古代帝国が成立し発展していくなかで、国家、都市が形成されていった数千年前から始まります。古代の人物に関する記録の有無やその形態には地域差がありますが、後世に紡がれた史料も含め、いにしへの時代に国がどのように作られ、各地が結び付いていったのか、そして、これらの動きのなかで現在、世界宗教として知られる信仰がどのように誕生していったのか、その軌跡を追ってみましょう。



#### I. ハンムラビ（在位：BC1792-BC1750）

『ハンムラビ法典』 V.シェイル 1904年 パリ刊

現在のイラクとその周辺にあたるメソポタミアといわれる地域で、前1880年に都市バビロンを首都とするバビロン王国が誕生しました。歴代王のなかで特に有名なのが5代目のハンムラビです。ハンムラビ王の時代、バビロン王国はメソポタミア地域の諸国を征服、併合して覇権を握りました。その治世の末期に発布されたのが『ハンムラビ法典』です。法典の中心は判例集です。「目には目を」で知られる被害と同じ制裁を行う刑罰は、行き過ぎた報復を抑制する意図がありましたが、加害者の社会的地位によって刑罰は変化しました。

本書は、1902年にイラン西南部のスーサにてフランスの調査隊により発掘されたハンムラビ法典の石碑をフランス語で全訳したものです。



II.アショーカ (在：BC268頃-BC232頃)  
『アショーカ王刻文集』アレクサンダー・カニングム 1877年 ロンドン刊

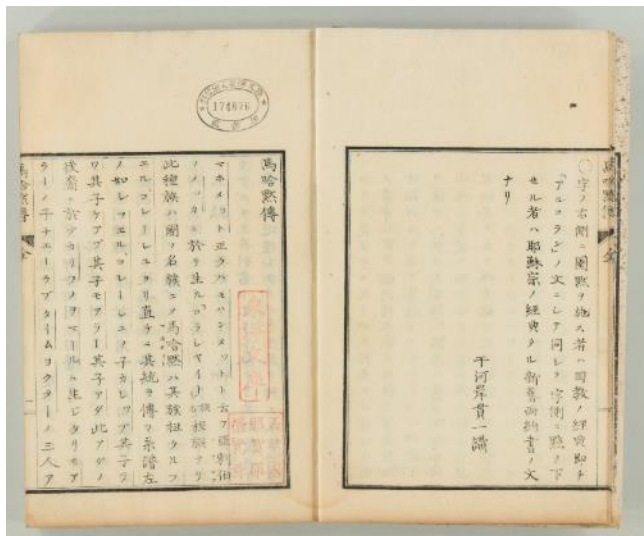
アショーカはマウリヤ朝第3代の王です。その治世に南端を除くインド亜大陸ほぼ全てとアフガニスタン南半を支配下に入れ、マウリヤ朝は最盛期を迎えました。アショーカは仏教を深く信仰し、武力ではなく普遍的な倫理（ダルマ）による統治を宣言しました。アショーカの勅令は国内各地に立てた石柱などに刻まれ、王による他の刻文とともに「アショーカ王碑文」として知られています。本書はそれらの碑文の集成です。



III.始皇帝 (BC259-BC210)  
『帝鑑図説』帳居正 1572年成立、1606年刊

戦国時代に群雄割拠する国の一つだった秦の王として、前221年に史上初めて中国統一を果たし、その後の歴代王朝の基盤を築いたのが始皇帝です。始皇帝に関するもっとも基本的な史料は、秦の次の王朝である前漢の歴史家・司馬遷の歴史書『史記』です。『史記』には、始皇帝が文字を統一したこと、法による統治をしたこと、万里の長城をはじめ様々な土木工事を行ったことなどが記されています。後世には、儒者の視点により始皇帝を暴君のイメージで語る記録も見られるようになります。

明の時代に作られた『帝鑑図説』は、中国歴代の王たちに関して儒教的観点から善行、悪行を解説しています。たとえば、その一節の「焚書坑儒」は、一般に始皇帝による儒者弾圧事件として知られていますが、その詳細については議論がわかれています。



IV. ムハンマド (570頃-632)  
『馬哈默傳』プリドー著、林董訳 1876 (明治9)年

イスラームの開祖であるムハンマドは、アラビア半島の都市メッカの商人でした。40歳の頃、山中の洞窟で瞑想をしていたときに神の言葉を聞き、その後も断続的に神から啓示が与えられたとされています。ムハンマドが「唯一神（アッラー）に帰依する」という教えを広める活動をメッカ、次いでメディナという都市で行ったことからイスラームは始まりました。本書は日本語で初めて書かれたムハンマドの伝記です。岩倉使節団に同行した僧侶の島地黙雷が英語の原書を入手し、使節団書記官の林董が翻訳しました。

## 2. 世界宗教と地域文化との融合と新たな社会階層の台頭 (7世紀～13世紀) (7世紀～13世紀頃)

この章では、古代から中世にまたがる人物をとりあげます。

仏教、ヒンドゥー教、キリスト教、イスラームといった今日に続く世界宗教圏が生まれ、これらの信仰が各地の文化と結びつきながら伝播し、現代につながる社会秩序が生まれました。広域な宗教圏の成立は、ユーラシア交易圏の形成につながり、人と物の動きが活発化していきました。

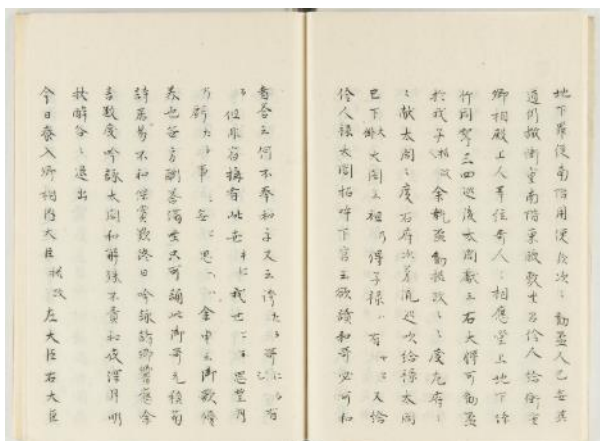
日本では、飛鳥時代から奈良時代にあたる8世紀頃に、唐の法制度を取り入れた律令制にもとづく天皇と貴族による統治体制が成立し、仏教は統治者たちにとって重要な基盤となりました。やがて、武士が台頭して政治に関わるようになり、12世紀末、源頼朝が征夷大将軍となり鎌倉幕府を開きます。同時代の中国、西アジアにおいても、皇帝、あるいはカリフといった統治者を中心とした国家体制のなかで武人や文人が台頭していき、新たな社会文化が形成されていきます。

### V. 武則天 (624?-705)

『歴代君臣図像』15世紀成立、17世紀刊

武則天は中国史上、唯一の女性皇帝です。唐の太宗の後宮に入りますが、太宗が崩御後に次の高宗の皇后となりました。そして高宗が早くに亡くなると、太子を次々と失脚させ、自らが皇帝となり国号を「周」に改めました(武周革命)。歴代王朝の年代記『資治通鑑』では、周を正統な王朝として認めていないため、武則天は皇帝ではなくあくまで后としています。日本で浸透している「則天武后」という呼び名は、武則天の皇帝即位を否定するために作られた称号です。

一方、科挙による優秀な人材を採用するなど、政治手腕においては高く評価されています。15世紀頃の中国でつくられた肖像画集『歴代君臣図像』では、武則天の肖像に添えた人物評にて、彼女の「人を用いる才」を評価しています。



### VI. 藤原道長 (966-1027)

『小右記』藤原実資 982~1032年頃(江戸時代写本)

平安時代の日本では、天皇家と姻戚関係を結ぶなどして力をつけた貴族が権勢をふるいました。このような背景のもと、栄華を極めたのが藤原道長・頼通の親子です。天皇を補佐し、左大臣として、ときに代行者として政務を行う摂政・関白の地位について政権を掌握しました。

『小右記』は、平安中期の貴族・藤原実資が半世紀以上に渡ってつけた日記で、道長が「この世は自分のためにあるのだ」と詠んだ有名な歌が収録されています。



### VII. バイバルス1世 (1230頃-77)

『バイバルス物語』 語物師の朗読テキスト 1922年頃書写

バイバルス1世は、エジプト・シリアを支配したマムルーク朝(1250-1517)の第5代の君主(スルタン)です。マムルーク朝では、奴隷身分出身の軍人(マムルーク)が、知識人(ウラマー)の協力をえて、政治権力を握ります。バイバルスは、シリアに進出したモンゴル軍や十字軍を撃退し、交通網や法行政を整備し、繁栄の礎を築きます。このため、「勇敢、寛容、公正」な君主として、伝記や史書に逸話が記され、語り伝えられています。

### 3. モンゴル帝国によるユーラシア統一からポスト・モンゴル時代へ (13世紀～15世紀)

13世紀初頭、モンゴル高原北東部を拠点とする部族に生まれたチンギス・カンが、広大なモンゴル高原に散住する遊牧民たちを統合したことにはじまるモンゴル帝国は、ユーラシア一帯の統合を果たしました。チンギス・カンの後継者たちは中国を征服して元を建て、中央アジア、西アジア、南ロシアの草原地帯、さらに東ヨーロッパまでその領土を拡大し、巨大な帝国の勢力下で東西のヒト、モノ、文化、知識、技術の交流が活性化しました。

モンゴル系の王朝は14世紀半ば以降に解体が進みますが、その後継にあたる勢力はその後中央アジアを中心に活動し、その影響は南アジア、西アジアにも及びました。モンゴル系部族出身のティムールは、わずか一代で中央アジアから西アジアに広がる巨大な帝国、ティムール帝国を建国し、その家系に連なるバーブルは、北インドに進出してムガル帝国 (1526-1858) を建国します。西アジアでは、中央アジアのトルコ系遊牧騎馬を祖とするオスマン朝が、1453年にビザンツ帝国を滅ぼし、東地中海域、北アフリカをも含む広大な帝国を築きました



#### VIII. チンギス・カン (?-1227)

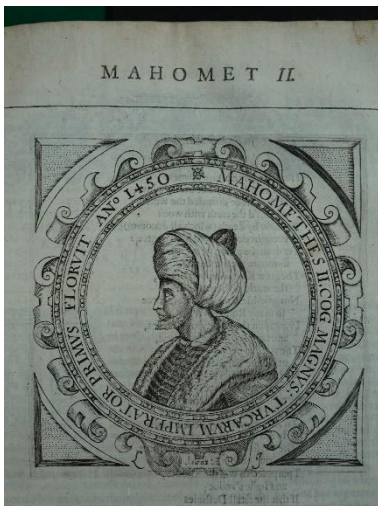
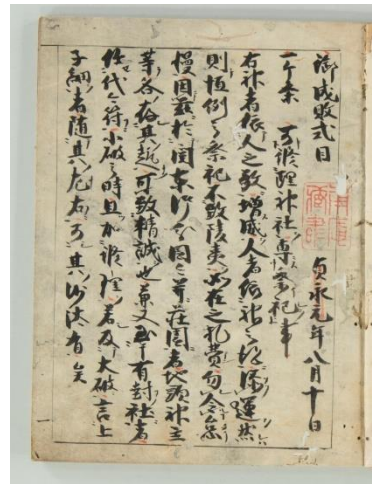
『元朝秘史』13-14世紀頃成立 1903年刊

13世紀はじめ、現在のモンゴルとその周辺地域には複数の遊牧民の集団がありました。これらを統一し、史上最大の領域を有することになるモンゴル帝国を築いたのがチンギス・カンです。『元朝秘史』は、チンギス・カンの生涯とその後継者の治世を中心に、当時の社会構造や慣習などを記しています。モンゴル民族の間で口伝えされた物語のため、伝説も多く含まれ、モンゴル部族の始祖は「蒼き狼」と「青白き鹿」であるとしています。チンギス・カンは1211年に中央北部を支配していた金王朝と開戦し、1215年に金の都・燕京を陥落させました。

#### IX 北条泰時 (1183-1242)

『御成敗式目』室町後期(15-16世紀)書写

『御成敗式目』は鎌倉時代に制定 (1232年) された武家政権のための法令です。武家社会の慣習や道徳を元に制定され、幕府の政治的領域における、幕府管轄の裁判についての法的取り決めを明らかにしています。五十一カ条あるその内容は、神社仏閣を重んぜよという条文に始まり、幕府の組織、土地の所有売買、刑事関係の事項、相続など、武士が重視していることが盛り込まれています。この法令を制定した北条泰時は、官位昇進や所領の拡大などに関心を持たなかったという公平無私な姿から、名君、賢王とたたえられることが多かったようです。



#### X メフメト2世 (1432-82)

『一般トルコ史』リチャード・ノルズ 1631年刊

メフメト2世が即位したあと、オスマン帝国は陸・海の戦力が強化され、領土を拡大していきました。1453年、ビザンツ帝国の首都だったコンスタンティノープル (現在のトルコのイスタンブール) がオスマン軍により陥落し、ビザンツ帝国はその幕を下ろします。これにより、バルカン半島とアナトリア半島の大半がオスマン帝国の領土となりました。本書は、オスマン帝国初代君主にはじまり、14～17世紀中頃までのオスマン帝国の歴代君主の肖像を載せ、君主の詳しい事績を記しています。

#### 4. 強大な国家の繁栄と東西の接触（16～19世紀頃）

16世紀以降、アジアでは東に明（1368-1644）と清（1636-1921）、西にオスマン帝国（1300頃-1922）、南にムガル帝国（1526-40、1555-1858）といった強大な力をもつ国家が、周辺国やヨーロッパ諸国と、ときに政治的、経済的な関係をつくり、あるいは文化的な交流をはかり、ときに衝突しながら、それぞれの国家統一、社会構造の形成、文化の発展が進められていきました。強大な力をもつ国家と、周辺国、あるいはヨーロッパ諸国と、ときに政治的、経済的な関係をつくり、あるいは文化的な交流をはかり、ときに衝突しながら、それぞれの国家統一、社会構造の形成、文化の発展が進められていきました。

19世紀以降、ヨーロッパとアジアの関係は、最新の軍事力を有するヨーロッパ列強が、植民地支配という形でアジア各地の人々の生活に直接的に影響を与えるようになっていきます。イギリスから清へのアヘン（麻薬）の密売を巡る争いに始まるアヘン戦争（1840-42）、インドでのイギリスの支配に抵抗する大反乱（1857-58）、ロシアの中央アジア進出に対する現地での抵抗など、アジアの諸地域はヨーロッパの本格的な進出に対面するなかで、それぞれの国家としての改革と自立の道を模索していくこととなります。



#### XI. バール（1483-1530）

『歴史地図帳』 シャトラン 1732年 パリ刊

バールはムガル帝国の初代君主です。かつて中央アジアから西アジアにかけて大帝国を築いたティムール（1336-1405）の子孫です。アフガニスタンのカブールを拠点に北インドへ進出し、1526年のパーニーパットの戦いでデリーを支配するロディー朝の軍に勝利し、ムガル帝国の端緒を築きました。

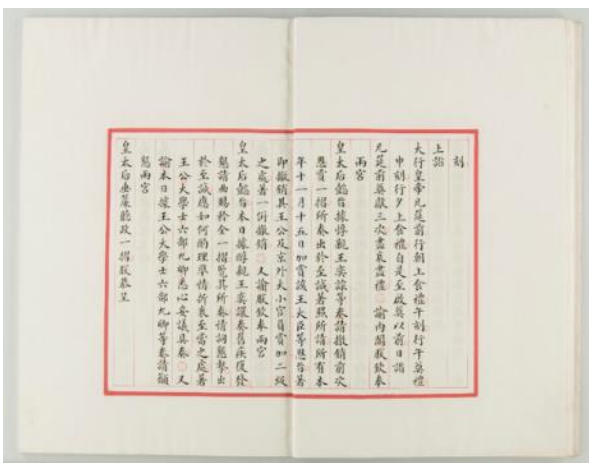
図は、フランスの地理学者による世界全域を対象とした歴史地図帳に掲載されたバールの肖像です。

#### XII. 織田信長（1534-82）、豊臣秀吉（1537-98）

『絵本太閤記』 1797-1802年刊

16世紀に日本各地に台頭した戦国大名のなかで、特に有名な人物が織田信長です。名立たる大名と戦い、室町幕府を事実上の滅亡に追い込むなど、国内統一を目指して突き進みますが、その途中で命を落としました。

信長の死後に天下統一を果たしたのが、信長の家臣、豊臣秀吉です。図は、豊臣秀吉の生涯を、全84冊で描いた長編小説です。信長の草履を懐で暖める場面など、秀吉の有名なエピソードが散りばめられています。



#### XIII. 西太后（1835-1908）

『大清徳宗景皇帝実録』 20世紀

第11代皇帝・光緒帝（1871-1908）の在位時の実績の記録です。光緒帝は西太后の甥です。西太后は息子の同治帝（10代皇帝）が亡くなると幼い甥を即位させ、代わりに政治を仕切る「垂簾聴政」を始めました。本書からは、その実態がかい間見られます。諸外国の進出が加速するなか、光緒帝は改革を目指しますが、その動きを阻止するべく西太后たちが起こしたクーデター「戊戌の政変」（1898年）により監禁され、1908年に謎の死を遂げます。その翌日に西太后も亡くなりました。その後即位したのが、清朝最後の皇帝・溥儀です。

## 5. 近代的な国家形成の軌跡（19世紀～20世紀）

19世紀以降、アジアでは西欧列強の世界進出に対峙するなかで、現代につながる国家の建設がなされていきました。1853年に「鎖国」を終えた日本では1868年に幕府が倒れ、新たに成立した明治政府により国家の体制が整えられていきます。中国（清朝）では、19世紀末には諸外国との不平等条約締結や朝貢国の朝貢停止など、王朝による支配力が低下するなか、孫文を中心とした革命運動がはじまり、1911年の辛亥革命により清朝は倒れ、中華民国が成立しました。一方、長く西欧列強との競合を続けていたオスマン帝国も、第一次世界大戦(1914-18)での敗北により帝国解体の危機を迎えます。このようななか、ムスタファ・ケマル・アタテュルクが主導した革命により帝政が終わり、トルコ共和国が樹立されました。

アジアの歴史・文化を対象とする「東洋学」は、ヨーロッパが東洋（オリент）に対して抱いた関心に始まるものですが、日本を含むアジア各地においては、西欧列強のアジア進出に対峙し、西欧文化に対面しながら、それぞれのアイデンティティを再発見するなかで成立、発展していきました。



XIV.ムスタファ・ケマル・アタテュルク（1881?-1938）  
『大演説（ヌトゥク）』 ガーズィ・ムスタファ・ケマル  
1927年

オスマン帝政の打倒者にしてトルコ共和国の建国者として知られるムスタファ・ケマル・アタテュルクは、共和国建国から4年たった1927年、与党「共和人民党」の大会で6日間連続の総計36時間にも及ぶ大演説を行って、トルコ独立戦争期と共和国建設期の出来事を総括しました。その演説はそのまま同年中に『大演説(ヌトゥク)』として出版され、トルコにおける公定トルコ革命史の基本文献となりました。

ほか、福沢諭吉、孫文など

## 広報用画像のお申し込みについて

### <画像使用全般に関してのご注意>

- ご提供可能な画像は、本文I～XIVの画像およびメインビジュアル（チラシ画像）です。
- 本展広報目的での使用に限ります（会期終了まで）。使用後はデータの廃棄をお願いいたします。
- 企画展名、会期、会場、画像・クレジット（所蔵先）は必ず記載してください。
- 転載、再放送など、二次使用される場合は別途申請をお願いいたします。
- Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードを施し、「画像の無断転載を禁じます」旨を表記してください。
- 基本情報、画像使用などの確認のため、グラ刷り・原稿段階のものを担当者にお送りください。
- 掲載・放送後は必ず掲載紙（誌）、同録DVDを担当者までお送りください。

### <広報画像クレジット一覧>

- （1点のみ掲載の場合）公益財団法人東洋文庫蔵
- （2点以上掲載する場合）すべて公益財団法人東洋文庫蔵 を必ずご記載ください。

広報素材のご提供は、下記のURL、またはQRコードよりお申し込みください。

URL

<https://x.gd/qvCBu>

QRコード

